聖衆来迎寺(しょうじゅらいごうじ)

比叡辻(ひえいつじ)二丁目の湖畔にある天台宗の寺院。寺伝では最澄(さいちょう)(768-822)の創建で、平安時代初期に源信(げんしん)(942-1017)が念仏道場として聖衆来迎寺と改称したといわれます。中世を通して延暦寺の念仏道場として栄え、戦国時代、織田信長による焼打ちのときも森蘭丸(らんまる)の父である森可成(よしなり)の墓があったために難を逃れ、優れた寺宝を数多く所蔵しています。

国道 161 号に面して旧坂本城の門を移したという表門があり、白壁の塀を巡らせて堂々としています。境内には、珍しい石造の巡縁の本堂や狩野探幽守信、尚信、信政、久隅守景筆の水墨障壁画がある客殿もあります。このほか、建築物・石造物・美術工芸品にわたって国宝・重要文化財が数多くあり、そのため比叡山の正倉院の異名をとっています。これらの寺宝は、毎年 8 月 16 日の虫干会(むしばしえ)に展覧されます。

〈国宝〉

絹本著色六道絵(15 幅)

〈重文〉

客殿、木造釈迦如来坐像、木造十一面観音像、木造地藏菩薩立像、木造日光仏立像、木造月光仏立像、鋼造薬師如来立像、絹本著色釈迦三尊十六善神図、絹本著色阿弥陀二十五菩薩来迎図、絹本著色十六羅漢図(2幅)、絹本著色楊柳観音像、法華経(8巻)、霊山院釈迦堂毎日作法、推朱香盆、絹本著色十二天像、犀角如意鑄銅三具足、銅水瓶

〈県指定名勝〉【聖衆来迎寺庭園】

聖衆来迎寺の客殿(書院)の東側にある庭園。枯山水を基調に珍しい「立花」の構成を応用しています。客殿から庭を眺めると中央奥の立石が「心」、その手前が「小心」、石橋を渡ったところが「見越」、その手前の集団石組が「請」、石橋の手前の石組群が「流れ」、ソテツのあるところが「銅」という具合に、立花の様式になっているのです。立花になぞらえることで、仏への敬虔(けいけん)を表したのでしょうか。

また、この庭園には鶴島・亀島があるので蓬萊(ほうらい)山式の庭ともいえます。このような折衷(せっちゅう)が行われているのは全国的に珍しいことです。また、庭園南の書院の縁先に、石造宝塔(せきぞうほうとう)の笠をさかさにして、太陽と月を組み合わせた手水鉢(ちょうずばち)があります。水を入れると三日月形が浮かぶので「月見の手水鉢」と呼ばれ、庭園のアクセントになっています。県指定の名勝になっています。

参考

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%96%E8%A1%86%E6%9D%A5%E8%BF%8E%E5%AF%BA>

以上